

尻屋地先磯根資源調査

(要約)

山内 弘子・桐原 慎二・仲村 俊毅

目 的

青森県尻屋地先の漁場管理に資することを目的に磯根資源の状態を調査した。

方 法

平成11年6月23日に尻屋地先の水深2.5、5、10、15、20mにある合計62地点の海藻を、50cm四方の枠で、海藻が少ない地点では1m四方の枠で1枠分、底生動物を1m四方の枠で2枠分採取し、種毎に湿重量を測定するとともに、個体分けが可能なものについては個体数を計数した。また、キタムラサキウニが採取された合計17地点では、殻径5cm以上の個体について、生殖腺指数（身入り）を求めた。

結果および考察

エゾアワビは、昨年と同じく、全調査地点の23%に当たる14地点で採取され、特に、アタカ島沖の水深5～10mと、藤石崎から廻り崎にかけての水深5～20mに多く見られた。全14地点での平均生息数は0.5個体/m²で、昭和57、58年と比較すると資源水準は依然として低い状態にあるといえた。

キタムラサキウニは、全調査地点の79%に当たる49地点で採取され、特に、岸島南部から北部にかけておよび藤石崎と廻り崎の間の沖合で多く、平均生息密度が2.0個体/m²あった。水深別の生息密度は、水深2.5、5、10、15、20mで各々平均2.0、1.9、1.9、2.0、2.4個体/m²となり、水深による差異はなかった。生殖腺指数（身入り）は、水深が浅くなるほど身入りが良くなる傾向を示し、水深5m以浅では身入りは15%以上あったため、販売可能と考えられた。なお、殻径50mm以上の個体は全体の97%を占めた。

マコブ2年目藻体は、全調査地点の32%に当たる20地点で採取され、特に、アタカ島から藤石崎にかけての水深10m以浅に多く生育し、平均生育密度が5.3個体/m²あった。本年の漁獲量は、生育密度、採取地点数とも昨年の4.6個体/m²、8地点より高い値を示したことから、昨年以上の水揚量を期待できると推察された。

マコブ1年目藻体は、全調査地点の27%に当たる17地点で採取され、特に、調査範囲の南端から岸島北部にかけておよび藤石崎以北に多く生育し、平均生育密度が5.1個体/m²あった。水深別の生育密度は、水深2.5、5、10、15、20mで各々平均12.7、12.9、4.3、0、0.1個体/m²となり、水深10m以浅に多かった。来年の漁獲量は、本年の1年目藻体の生育密度が昨年の約1/14に留まったため、本年を大きく下回ると推定された。

発表誌：平成11年度尻屋地先磯根資源調査結果報告書、青森県水産増殖センター、平成11年10月